Osaka University Knowledge Archive

Title	『四声猿』を通してみる徐渭の人間性
Author(s)	塘, 耕次
Citation	中国研究集刊. 1998, 21, p. 16-36
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61228
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

『四声猿』を通してみる徐渭の人間性

塘　耕次
（愛知教育大学）

一、攻撃的精神

徐渭の性格には攻撃的な面が顕著であった。陶望齢は「徐文長伝」で「性は豪恣、間ま或いは気勢に藉り、以て不快とする所に酬ゆ。人も亦た畏れて怨む」と述べている。豪快な気風で人当たりがきつく、気に食わない所があると人と衝突した事が分かる。徐渭自身の言葉によれば「直」であり、「人と為り義の関わる所無きに度りては、輒ち疎縦にして儒の為に縛られず。一たび義の否とする所に渉りては、恥詬を干し穢廉を介し、頭を断つと雖も奪うべからず」（三２６／６３８、自為墓誌銘）と言うように、正義感に燃え不正と争う骨っぽさをもっていたようである。

この点に関しては、杭州に伝わる数々の逸話（注１）がよく語っている。文集の中から例を探すと、次のようなものがある。嘉靖三十四年、朝廷では倭寇を征伐するため海上で大規模な軍事行動を起こした。そのため紹興の町では兵士が増え、中には乱暴を働く者も多くなった。ある日、徐渭と友人の呉兌が町を歩いていると、紅色の錦衣を着け手に刀、懐に錐をもった四人の力のありそうな大男の兵士が、四方をにらんで立っていた。聞くところによると、彼らは町で無銭飲食をし、妓楼に遊び、その後人家に押し入ろうとして騒がれ、県丞と県簿に責任をとらせるため、乱暴を働いているのだという。徐渭と呉兌は示し合わせて、一族の者を呼びに帰り、周りの人々と一緒になって彼らを裸にしてこらしめた（三１９／５３９、贈呉宣府序）。

『四声猿』の中でこのような特徴をよく表しているのは『後漢書』禰衡伝と『三国志演義』二十三回に基づいて禰衡と曹操の争いを描いた『狂鼓史漁陽三弄』（以下『狂鼓史』）であろう。

冥府の裁判官、察幽は間もなく天帝に修文郎として招かれる禰衡に向かい、昔の曹操とのいさかいの場面を再現してもらう。バチを取り上げた禰衡は、太鼓を打ちながら曹

操の悪事を厳しく弾劾して行く。『後漢書』禰衡伝と『三国志演義』を徐渭の本戯曲と比較すると、『後漢書』は太鼓の場面は少なく、また曹操の悪を攻めるより曹操の前で禰衡が裸になって曹操を恥ずかしめた方に主点がある。また、『三国志演義』は曹操の悪を攻め立てるが、悪の列挙に具体性がなく抽象的、かつ事実を捏造している（注２）。徐渭の方は事実を述べている分、攻撃に厳しさを増し、劇の構成もうまく説得力が生まれているようである。

この厳しさの理由の一端は、本戯曲が書かれた動機もかかわっている。徐渭の十三歳年輩の友人に沈鍊という人物がいて、賄賂政治を行い専権をふるう厳崇に反発していた。嘉靖三十年には厳崇父子を弾劾し、誅殺を願う上書を差し出したが、逆に職を奪われ笞杖の罰を受け、保安州（陝西省延安府）に流された。しかし、彼は厳崇の藁人形を作り、子弟を集めてこれを射た。その後百蓮教の閻光が漠北に侵入し、官軍に捕らえられた際、沈鍊は閻光の師であったと訴えられ、保安城の東市で腰斬に処せられた（嘉靖三十六年）。この事件に憤った徐渭は事件を知ってから間もなく、本戯曲を書き上げたと言われている。彼が朝廷を壟断する勢力を憎む気持ちは、嘉靖三十四年に楊継盛が処刑されたときの「雨雪詩」十首（ｋ８／８６１）にも現れているが、本戯曲はごく身近に接し、尊敬する先輩の事件に触発され、創作のエネルギーが吹き出したようである。一般の意見によれば、彼は沈鍊を禰衡に厳崇を曹操になぞらえたとされているが、それが禰衡の攻撃が厳しさを増した一つの理由でもあった。

「わしはバチに借りて曹操を罵倒し、太鼓の音に合わせて彼を攻めよう。わしの一句一句の切っ先は剣戟を飛ばし、わしの一声一声の稲妻は走って風沙を巻き上げる。曹操、太鼓の皮はおまえの体の殻だ。このバチはおまえの脇の骨だ。このクギの穴はおまえの心臓の毛皮だ。この板はおまえの牙だ。太鼓の両側の皮を破れるほど激しく打っても、一通りではおまえの罪を数え切れないが、まあやはり始めから数えてみよう。わしの言うことをとくと聞け」（注３）という禰衡の言葉には、沈鍊の無念を晴らそうとする徐渭の深い思いが込められている。しかし、禰衡は才能がありながら官界で出世できなかった点でも気質の点でも徐渭に似た人物、いわば分身のようなものであったから（三１／４８、鸚鵡に「我則禰衡」という）、禰衡の憤りの言葉はそのまま徐渭の本心から出たものでもあったことを忘れてはならない。

上に見たような攻撃的精神は、彼の実生活の多くの舞台で、積極性、勇敢さ、冒険心、行動力、決断力、独立心、自主性、自己主張などさまざまな形をとって姿を現した。

いくつかの例を挙げる。

彼は若いころから剣を習い、弓も、馬術も堪能であった。この点に関しては、『雌木蘭替父従軍』（以下『木蘭』）の中の主人公木蘭にいかされている。兵法にも関心があり、胡宗憲のもとで倭寇対策を種々献策した。嘉靖三十三年の柯亭の戦いでは、短衣を着けて戦士の中に交じり、地形と敵の配備を観察したのち、官軍の背水の陣の誤りを指摘した。このような中に、行動力、積極性、勇敢さを見ることはたやすい。また、三十歳の正月、占筮して牧羊生活を決意したり（注4）、北上して戦役に従おうとしたり（注5）、さらに、五十八歳の時、宣化総督の呉兌に招かれ塞北まで行き、風物に狂喜し、病で幕下を辞去した後も、老体を圧して何度も行きたいと願った行動などに、未知のものへの挑戦、果敢な積極性を感じとることができる。ちなみに豊臣秀吉の朝鮮遠征を撃退するのに功労のあった李如松は、徐渭の才能を高く買い幕下に招き厚遇していたから、もし老齢でなければ徐渭が朝鮮まで出征していたのではなかろうかという想像も、真実性がないわけではない。彼の次男枳はじっさいに李の幕下におり、朝鮮に出征している。

このような徐渭の積極的な精神は、当然人物への好みにも現れている。

まず戯曲では、『木蘭』の主人公、木蘭は十七歳の女の身でありながら、病で衰弱した父の代わりに男装して出征し、賊の大将を捕らえる手柄を立てる。『女状元辞鳳得凰』（以下『女状元』）の主人公、黄崇嘏も女の身でありながら、男装して科挙試験に合格し、官界で名声を手に入れる。どちらも若い娘が積極的に世間に出て、成功を勝ち取る筋立てである。

「白母伝」（三25／626）に書かれた白母の活躍は、才知と勇敢さで木蓮と黄崇嘏の合体した姿を連想させるので、紹介してみる。葛氏の娘の白母は十六歳で病弱の白瑾に嫁いだ。白瑾が分宜の知県であったとき、隣境に百余人の盗賊が出て役所に迫った。役人たちが妻子を連れて逃げ出す中、白母は一人止まり家人に命じて役所の門を守らせた。その後、主人を別室に移し数千両の銀を汚池の中に隠すと、主人の服に着替え賊を待った。賊が来ると偽ってねぎらい、ひそかに目印をつけたかんざしや衣服を与え、その発覚を待ってのち捕らえた。この話に感動した徐渭は長い論を付け、「文吏の婦を以て其の家衆数人と、百余の創起の寇を呼吸の間に阻み、貯金を匿し、病男子を徙し、冠服を仮り、蔵する所を出し、又た其の欲する所に黙識する。母の敏給にして奇なる者の若きを、未だ聞かざるなり」と絶賛している。さらに、倭寇や北狄の来襲に思いを寄せ、「もし数万の衆を率いて仕事をさせれば、どれほどの働き

をするか分からない」とまで述べている。

積極性、勇敢さ、冒険心などの愛好は当然生き生きした活発さ、当意即妙の才知、気力の充満などの愛好につながって来る。

例えば、『玉禪師翠郷一夢』（以下『翠郷夢』）に登場する妓女紅蓮は、玉通和尚を堕落させるどうしようもない蓮っ葉女であるが、徐渭の筆には憎しみがこもっていないようである。二十年の禁欲生活を騙されて破り、後悔する和尚に対し、紅蓮は次のような多少卑猥さもこもった揶揄の言葉を次々と投げかける。

「結び合おうとする心はなかったと言いながら、あの最後の寝技は一体だれの伝授なの」（注6）。

「あんたは幸福とは何かを知らないのね、まったく。あんたのような瓢箪がわたしのような桃の花の顔と擦り合うことができたのよ」（注7）。

「マトウガなんて神通力不足よ。もしこの紅蓮に会えば、鉄の阿難だって軽くその体を奪ってしまうわ」（注8）。

「和尚さまは今になってもあれこれと言い訳するわねえ。（あんたが求めたものは）本当のことを言うと、涅槃寂円じゃなく、磨盤両円（上下でこすり合うこと）じゃなくて」（注9）。

玉通和尚をやり込める紅蓮の妖精のように若く生き生きした魅力や才知を、徐渭はむしろ楽しんで描いているようである。同じく若く生き生きした魅力を描いたものに馬技を演ずる女性の大道芸人を歌った詩もある（三7／234、往年観伎走解……）。

兵法における気や策略の重視、書画における気の重視、また個性の表現による独創性の発揮などについて、陽明哲学の影響が指摘される事もあるが、むしろ彼が本来もっていた攻撃的精神、より分かりやすく言えば、未知のものへの積極的なチャレンジの精神、果敢な冒険心、独立心、自主性などが基礎になっていたものと思われる。

二、劣等感と神経症

人は誰でも幾分かの劣等感をもって生きているが、徐渭の場合も例外ではなかった。彼の劣等感はむしろ普通の人より大きかったかもしれない。というのも、精神の安定を助け、肉体のより所となる家庭環境に幼年から恵まれなかったからである。今、彼の家庭の不幸を列挙してみるとおよそ次のようなものがあげられる。

○生後百日で父が亡くなった。

○生母は苗宜人（父の後妻）の侍女であり、徐渭が十歳

の時家から出された。家産も傾き徐渭に与えられる予定であった奴僕四人が夜逃げした。苗宜人も徐渭が十四歳の時に亡くなった。以後、胡宗憲の幕下で活躍した一時期を除き、ほとんど貧乏生活に苦しんだ。

○腹違いの二人の兄（父と先妻童氏の息）も家産を助ける力はなかった。長兄は商売に失敗したうえ、神仙道に夢中になり会稽山で丹薬の製造中突然亡くなった（徐渭二十五歳）。次兄はこれよりはやく、貴州で郷試を目指しているうち、酒の飲み過ぎで命を落とした（徐渭二十歳）。二人とも子供は残していない。

○愛妻の潘似を結婚三年目で失った（徐渭二十六歳）。これ以後、良妻に恵まれず、後妻張氏を自らの手で殺害する事件まで起こしている。

○生母を迎え、女を雇って世話させたが出来が悪いので売った所、逆に訴えられた。訴訟事件には生涯に少なくとも三度巻き込まれている。

○長男の枚もできが余りよくなく、徐渭の老後の生活を十分助けたように思えない。

「畸譜」によって彼の生涯をおおよそ見ただけでも、上のような事例を挙げる事ができる。幼少の頃からの父母との別離に始まり、結婚後も落ち着いた居所には恵まれることが少ない。潘氏に入り婿したが、すぐに死別し、師の季本の書斎一枝堂に住み生母を迎えたが、買った妾に訴訟を起こされる。後に瑪瑙寺、目連巷、獅子街、酬字堂などと転々とし（四十年間に十回転居した。三7／291、雪中移居二首）、晩年には次子枳の入り婿した葉家に頼って一生を終える。その合間にも、職を求めて奔走したから、あまり落ち着く間もない。彼の劣等感も父母の早い死、生活力のない兄たち、浮草のように転々とする家庭環境の不備と、そこから生じる貧乏のためかもしれない。しかし、貧乏は孔子の昔から学者にとってそれほど不名誉なものとは考えられなかったから、他にももっと大きな原因があったと考えられる。恐らく彼の場合三年に一度の科挙試験に連続八回落ち続けたことが重要ではあるまいか。

徐一家は当時零落していたから、生活能力の無い兄たちよりも当然若い徐渭に期待が集まった。母の苗宜人も「日夜テストを試み、合格を望んでいた」し（三26／631、嫡母苗宜人墓誌銘）、彼の方も経世を重視し、強い儒者意識をもって学問に打ち込んでいた。自為墓誌銘（既記）の中で、「文と道に志した」と言っているのは、儒者の正統な学問に打ち込んでいるころの思い出である。彼が時折用いる「吾が儒」（三23／597、函三館記。s3／1106、上提学副使張公書）、「吾が夫子」（三19／554、

周愍婦集序。三２３／６０９、石刻孔子像記)、「吾が孟子」(周愍婦集序)という言葉もそのような時期のまじめな姿を伺わせるし、二十歳で作った「池中詩」(三５／１４１)にも試験合格を目指す若者の強い自負心が伺われる(三２１／５８３、三教図賛に自らを儒、道、仏の三教合一の立場に立つと述べながら、三教を首、背、尾になぞらえている。儒教を首にたとえているのは、三教の中でやはり主要なものと意識されていたことがわかる)。

しかし、現実の彼は科挙試験に落ち続けた。明代の科挙試験は府県での童試、省都での郷試、中央での会試の三段階があったが、徐渭は生涯郷試に合格できなかった。身分は最下級の童試に合格した生員のままである。しかも成績優秀で糧食を供される廩膳生員になれたのが、やっと三十二歳の時だったから、長期間生活の安定を得なかった。そのようなうらぶれた様子は、五回目の郷試に落ちたとき白髪に感じて作った「渉江賦」(三１／３５)にも現れている。

ところで徐渭の「畸譜」は彼の亡くなる七十三歳に書かれた記録で、若いころからの記憶を書いた尊重すべき年譜である。ほとんど箇条書きの短文の中に、長文で目立つおよそ次のような内容の二つの文章がある。

八歳で陸先生につき八股文を習い始めた。塾では一日と十五日に試験を課したが、わたしはたちまち二、三枚を書き上げると食事に向かい、余りの速さに先生を驚かせた。先生は、「昔の人は十歳で文章が書けたが、あなたは八歳で書ける。祖先の喜びであり徐門の宝だ。いわゆる謝家の宝樹とはあなたの事ではなかろうか」と称賛した。このことが紹興府の学官の陶曾蔚の耳に入り、兄とともに褒美を授けられた。

十歳で兄とともに山陰の知事、劉昺に面会した。知事はわたしを試そうとし「其の所に居りて衆星之れを共にす」という題を与え、自身は訴状の整理に取り掛かった。知事の文書の処理が二十枚にも満たぬうちに、わたしは下書きもせずに書き上げ、彼を驚かせた。知事は、「天言わずして星の之れを共にするは、天諄諄然として以て之れが共にするを命ずるに非ざるなり。星も亦た言わずして衆星之れを共にするは、衆星諄諄然として以て之れが共にするを約するに非ざるなり」まで読むと大いに褒め、佳紙と兎毫を授け、「八股文ばかりに熱中せず、古書を多読し将来の大成を期するように」と諭した。

この記録で注目できるのは、彼の目を見張る神童ぶりである。特に八股文をよくした事実に注目したい。八股文は科挙試験の文体である事を考えると、彼は七十三歳になってもまだ科挙試験に落ち続けた事を忘れていなかったことがわかる。また、八股文に熱中しないように諭されたとさ

りげなく書いているのは、もし八股文をやめずに続けておれば、簡単に合格できたといいたいのであろうから、逆に彼の屈辱感の強さを感じさせる。

心理学の教えによれば、優越感は劣等感の防衛からもうまれるという。これは自慢をする人間の深層心理に、劣等感が存在することを意味している。そうだとすると、若いころ八股文をよくし文章を褒められ、徐門の宝であったと書いたこの老人は、死ぬまで科挙を意識し、科挙に落ち続けた劣等感に相当深く悩まされていたと言ってよいかもしれない。彼の科挙及第への執着ぶりは四十六歳の作品「丙寅元日」（三7／236）に付したことば、「病後筆を挙業并びに諸散文に絶たんと欲するも能わざるなり」にもうかがわれる。及第への執着、さらに一家の期待が大きければ大きいほど、失敗による劣等感も強くなる可能性がある。

『女状元』の中には、この劣等感が見事に投影された例がある。

本劇の第二齣は周丞相が科挙の主査となり、主人公の黄崇嘏たちを試験する場面である。先述したように明代の科挙は八股文を試験の文体とした。しかし、徐渭はここでは詩賦で士を採用するという設定にしている。これには、八股文を主体とした科挙試験に落ち続けた徐渭の強い願望が込められている（『故宮文物月刊』139、王家誠、徐渭伝14参照）。さて、三人目の受験者は胡顔という少し癖の強い人物である。彼は主査が与えた題に対し早くもおよそ次のような異議を唱える。

「ほかの人物の前句が華やかで縁起がよいのに、わたしだけがなぜ悪いのですか。あなたのお気持ちははっきりしている。わたしを子供扱いすることです」（注10）。

次に「老いたやもめは　いばらのかんざし一つだけ　戦で何年も国土は荒れ　米を欠き柴も無し」（注11）という句に続けるように言われると、それを将来自分には米も柴も無くなる前兆と受け取り、「合格しないことははっきりした」（注12）と拗ねてみせる。

韻の間違いを指摘されると、「詩の韻なんて運命と同じ。先生がよいと言えば、悪いものでもよくなるし、よくないと言えば、よいものでも悪くなる。運は先生次第で、わたしにはない」（注13）と答え、「文章の評価には天下の公論がある」という主査にたいしても、「もし公論が大事なら、文章は天下に受けることを願わず、試験官に受けることを願うだけという言葉はなくなるじゃありませんか」（注14）と言い返す。

この胡顔の拗ねていじけた態度には、科挙に落ち続けた徐渭の敗者の意識――相手に悪意を見ずにはおれない負け犬意識、被害者意識――が濃厚である。反抗的な態度は、

敗北感を逆に相手を批判することでかわそうする防衛本能から出たものである。このような胡顔に対し、主査は無駄口を聞く暇は無いと怒り、デタラメな男というレッテルを貼る。ところが興味深いことに、主査は胡顔に対し、「彼は本音を隠さない。心は驕って貪婪なくせに、口では寛大な振りをする輩とは違っている」（注15）と評価し、最終的には第三位で合格させる。この意外な結末はおそらく自分（胡顔）を受け入れてほしいという、徐渭の無意識の願望が結実したものであろう。

徐渭に劣等感があり、科挙に合格できなかったことが大きな原因ではないかと指摘したが、彼にはそれ以外にも「心の病」があった。彼がしばしば人と衝突して嫌われたのは、恐らく劣等感の防衛からくる傲慢な態度や神経症に由来するヒステリーな行動のせいであったろう。しかし、劣等感と神経症をはっきりと分界つけることは困難である。劣等感が強まれば神経症を招くし、神経症は劣等感を強めるであろう。したがって、彼の体の中でこの二者は一つに融合し、時に不可解な爆発となって発散したと理解しておくことにする。

徐渭に神経症が出たのは、「畸譜」によれば四十一歳である。この年彼は張氏を娶り、八度目の郷試に応じたがやはり合格できなかった。その後、「祟」がしだいに盛んとなり、試験に応じる暇も無く、以後の科挙受験をあきらめる事になった。「祟」とは一般の辞書によれば鬼神が害を与えることである。彼は鬼神が憑いた状態で体が硬直した事を述べているから（注16）、「祟」をこのように解釈するのは正しい。また、四十五歳で易（失常・正常でなくなる）を病み、耳にクギを突き刺し、四十六歳で妻を殺し牢獄に入った。したがって、本格的な狂疾は後半生からになるが、実はそのような傾向はもっと早くから見られた。妻を殺し、牢獄の中から友人の諸大綬に援助を求めた手紙に、「某は生来蠢蹂、動やもすれば輒ち顛迷、其の外に在るに当たりて縦なり。辟えば蝦蟹　草蕭に跳擲し、瞋瞋然として、害を遠ざけ身を全くするを知らざるが如し」（三１５／４５０、啓諸南明侍郎）と語っている。生まれつきせかせかと動き、事を起こせばいつも頭が混乱し正気を失う。エビやカニのように目をしきりに開けたり閉じたりキョロキョロし、害から遠ざかることを知らないようだというのがおよその意味である。どこか神経症的な傾向を感じさせる。また、「夙くから心疾有り」と述べ、自分の性質を「褊性」とも述べている。

神経症はしばしば幻聴と関係付けられる。「耳竅垢多きこと　我に若く無し、烘烘響きを作し　火を聞く如し」（三５／１４４、題画）というように、彼は時々耳鳴りが起こ

った。この詩では耳鳴りを垢のせいにしているが、単なる垢でこのようなことが起こるとは思われない。仮に起こるとしても、火の音というのはより深刻な原因があるように思われる。一方、「某亦た隻耳の聾を病む……」というように時々耳が聞こえなくなった。『医学』（佚草、巻九）の冒頭に「耳」の項があり、耳と腎との密接な関係を述べ、「腎気が充実すれば耳はよく聞こえ、腎気が虚弱になれば耳が聞こえなくなる。腎気が足りなくなると耳鳴りがし、腎気が結ぼれ熱すると耳が化膿する」と述べている（注17）。これは彼自身が耳の失調は単なる耳垢のせいではないと考えていたことをよく示すものである。

神経症はしばしば幻覚とも関係付けられる。徐渭は不思議なほど異変と遭遇した。例えば、最初の妻が亡くなる数日前、一人の嫗が裏門から入って来、犬に追いかけられ積んだ稲の中に跳びはねて見えなくなった。亡くなって一月余り、家の下僕が漁から帰り、夜門外に船を泊めていた。すると、突然水中に転落し鬼神がついた状態になり、妻とそっくりの声でしゃべり始めた（三26／634、亡妻潘墓誌銘）。これらの記録は徐渭が幻視や幻聴を信じやすい性質、もしかすると彼自身に幻視、幻聴があったのではないかと疑わせるものがある。

「紀異」（s6／1144）では自らが遭遇したいくつかの異変をおおよそ次のように列記している。

○績に行けば、風雨で江があふれた。厳に至り異変を感じて引き返した。江があふれ数里の広さの中を太さは両抱え、長さは腕四本の黄蛇が、船の棹にも驚かずに東から西に従って来た。わたしたちが西に着くと突然見えなくなった。

○燕にいた二月の始め、啓蟄にまだ遠く、ひどい寒さの時、カゴに乗り平原を進んでいると、緑色で鱗が鯉のような蛇が道にうずくまっていた。他のカゴに踏み潰されないかと振り返ってみていると、消えていなくなった。

○ある朝、早く起きると十八脚を持った非常に紅い大蜘蛛のようなものが軒に糸を引いていた。「もし凶兆なら糸を上に引け」と唱えると、果たして上に引いた。

○ある日、床から四足で赤い口をした尺五の蛇が出て来て、机の脚の回りを数巡して姿を消した。

どれも彼の周辺に起こった不思議な出来事である。すべてが幻覚とは断定できないものの、健常な精神に起こった事件とも考えにくい。彼は「病中復た異境多し」（与季子微）とも告白しているから、これらは病んで朦朧とした頭

に浮かんだ幻覚の可能性も強かったと考えられる。

精神分裂病の症状に関係妄想と呼ばれるものがあり、自然界の出来事に深い暗示や意味を見いだす事と定義されている。この点、彼は自然界の異変に注目し、神経質に反応し記録することがあった。例えば、「貢氏伝」では聞き書きであるが、「亡くなる前日、大火が空中より流れ、室の南に落ちた。皆が驚いて走って見に行ったが、何も見つからなかった」（ｋ２２／１０４２）という。

彼の直接の体験では、最初の妻が亡くなって十年目、実家から送って来た妻の服を見て泣いていると大雪になった（三１１／３４２、内子亡十年……）。胡宗憲の幕府にいるときも、海中の白牝蛟を罵ると突然注ぐように雨が降って来た（三７／２５７、白牝蛟）。道堅の子が亡母の哀悼の詩を書くように依頼して来たときも、突然雪が降って来た（三４／９８、道堅母遭哀詞）。また彼は杜甫を敬愛していたが、その本を読むのは常に「風雨晦暝」のときであった（ｓ２／１０９８、題自書杜甫拾遺詩後）。徐渭はまた好景を前にすると急に詩が作れなくなることもあった（三１１、予自浙抵新安……この詩は四十一、二歳の頃）。

四十二歳、胡宗憲の軍に従って厳灘を通ったとき、厳子良が長年羊皮裘を着ていたのを嘲笑する詩を作ろうとしたとき、突然舟が突き出た岩に衝突し、殆ど壊れそうになった。徐渭は招宝山で牝蛟を罵ったとき（三７／２５７）、突然大雨が降ってきたときの恐怖を思い出した。そこですぐに祭物を用意し、舳先で祈ろうとしたが、群吏に笑われるのをおそれてできない。ただ、詩を焼き捨て心中で無事帰れたら罪をわびてお祈りするというしかなかった（ｋ４／７８６）。

このように自然界の異変に注目するのは中国人の伝統的気質であり、天人相関説の流行にもつながるものであるが、異変を特に自らの行動と密接に結び付けて理解しているのは関係妄想と解釈できるのではなかろうか。

結局、彼の狂的な症状は恐らく次のようなものだったと想像できる。何か刺激的なことに遭遇すると、鬼神がついた状態になり、体が硬直し正気を失う。体が熱くなり耳なりがし、幻視や幻聴が起こってくる。目をキョロキョロ動かしながら、あちらこちらと走り回り、高揚した気分で人といさかいを起こす。刺激的な事の中には悲劇を招く刺激、――例えば不倫を疑い妻を殺害することから、些細な喧嘩まで――があったが、幸福を招く刺激もないわけではなかった。その一例は「生平雪を見れば顛歇まず」（三５／１４３、二十八日雪）とあるような雪の刺激であった。

ところで、この狂疾を治す一番の特効薬は何だったろう。友人の馬世培の訪問を歌った次の詩が解答の手がかりを与

えてくれる。「時に我が病始めて作り、狂走時として休む無し。吾子之れを一見し、握手し相い綢繆す。却って云う、始めて作りし病は、未だ薬餌を投ずべからずと。好き言語を以て、我が奇痾を瘳しめんと欲す」（三4／73、喜馬君世培至）。つまり薬よりも何よりも、友人の好き言語、言い換えれば理解あるやさしい言葉が最も効力のあったことを暗示している。

ここで再び女状元に返って見よう。

主査の周丞相に対し胡顔は最後に、「合格させてください」（注18）とまで要求する。主査と胡顔のようなくだけた会話が実際の会試の場面で行われるようには思われない。胡顔の言葉は、「奔放で気まま過ぎる」（注19）から、主査は激怒して当然である。しかし、彼は非難の言葉の中にも厳しさは見せず、胡顔の被害妄想的な拗ねていじけた態度にも暖かく接し、合格点まで与える。このような周丞相の言動の中に、徐渭の劣等感と神経症をいやす最高の特効薬を見いだす事は容易であろう。

三、女性的精神の尊重

徐渭が一章で見たような攻撃的な精神、別の言葉で言えば男性的な精神を好み、自らもそのような人物であったにもかかわらず、一面で女性的な精神を尊重していたことも忘れてはならない事実である。『四声猿』のうち三作品が女性を主人公に選んでいる所にもそのような傾向が伺われる。彼女たちは狂鼓史の禰衡に匹敵するかもしれないほどの勇敢な女性たちである。典型的な木蘭の例では、彼女は男の部下を従え、十二年間も戦場で働き、敵の首領を生け捕りにする手柄を立てる。「アカザの杖にすがり、空行く雁の数を数える」（注20）弱々しい父親、あるいは男色の相手に木蘭を考えている、滑稽な軍人に比べると格段に威厳を備え、行動力に富んでいる。しかし、そうかと言って男性的な面ばかりが賛美されているとも思われない。例えば、『木蘭』の最後の場面、女に戻った木蘭は婚約者の王郎に対し、恥ずかしさで背を向ける。「十二年間も長官をしていて、何を恥ずかしがるの」（注21）と母親にたしなめられて、次のように答える。

「わたしはただ団欒を望むだけ。だれが結婚を望みましょうか。会っていきなりのことで本当に恥ずかしい。昔からあなたが文学に優れ朝廷の高官になることは知っていました。戦場で駆け巡る我が身が恥ずかしいし、あなたの嫁としてふさわしくない」（注22）。

ここでは戦陣で男に対抗して生きて来ても、まだ羞恥心を失っていない女性の控えめで柔順な美徳が好意的に描か

れている。

『翠郷夢』における紅蓮も禅師を堕落させる悪役であるが、女性らしい気遣いを十分感じさせる。

「わたしは営妓です。（柳長官は）禅師が赴任の出迎えに来ないのを不満に思い、わたしを使って罠を仕掛けました。禅師殿は立派な長老、わたしはなぜこのように仏菩薩を犯すような事をするのでしょう。ああ、官法は炉の如しで、長官の言うことは聞かねばなりません」（注23）。

これを読むと、女性のもつ従順さ、弱さに打たれ、無理に悪の仲間入りをさせられる紅蓮に対し、むしろ同情の思いを禁じ得ない。ところで、ここで忘れてならないのは、徐渭が女性の外見の美の描写には比較的執着していないという事実である。例えば、木蘭は「おかま（男色の相手）」黄崇嘏は「嫦娥」といわれる程度であるから、なんとなく美人ではないかと読者は思うにすぎない。戯曲であるから、外見の美は舞台で発揮すればよく、台本にまで描写する必要はないという理屈も成り立つ。しかし詩文にも女性美の印象的な描写は少ないようだし、彼の描く画中の人物には目鼻立ちに特徴がなく、稚拙に見えるというのも事実である。このようなことを考えると、徐渭は女性の外面の美に比較的関心が向かなかったか、あるいはそれほど重視していなかったのではないかと思えてくる。この点で興味深いのは、「予、貌を晩に譬む（年をとってから美人を憎んだ）」という言葉である（三20／571、書画後）。彼が好んだのはむしろ女性の内面の美、つまり優しい感情、細かな気遣い、忍耐、服従、寛容、大きな包容力など、より正確に言えば、女性的な徳（女性らしさ）だったと考えられる。

このことを見るために『狂鼓史』を振り返ってみよう。本戯曲の半ば以上は曹操の悪事を暴いて行く禰衡の姿によって、男性的な攻撃性が表現されている。

例えば、曹操が疲れて眠ろうとすると、禰衡は「おまえが疲れても、俺の太鼓が罵りたいことはまだまだたくさんある」（注24）と許そうとしない。曹操があくびをすると、そばから判官が「部下どもよ、こやつを縛って行け。鉄鞭を百回くれてやり、もう一度はじめからやり直してもらうことにしよう」（注25）と叱咤し、「痛快、痛快、先生よ、どんどん続けなさい」（注26）と新たな攻撃を煽り立てる。ところが、最後近くなって理解しがたい場面が訪れる。天上に去ろうとする禰衡は判官に向かい、「寛大なお計らいによって、曹瞞（曹操）をお許し願いたい」（注27）と要求する。この突然の変化をどう理解すればよいのだろうか。梁一成は本戯曲を法と人情の両者を描いたものであると述べ、禰衡を内方外円に設定した徐渭の人物造形の巧みさを

指摘するのみである（注28）。しかし、台本の技巧上だけの問題であろうか。禰衡と徐渭が極めて類似の性格をもっていたことも考えると、心理上の問題も考慮しなければなるまい。とすれば、ここには徐渭の女性的な徳への愛好が表現されていると理解すべきではなかろうか。つまり、いくら攻撃を加えても禰衡（＝徐渭）は最後には寛大な許容の精神を発揮しないわけにはいかなかったのである。そのせいか、劇は曹操の悪を暴いて行く筋立てでありながら、冷酷な残忍さからはほど遠い印象となっている。

女性的な徳への愛好は他の戯曲でも見ることができる。典型的な例は、やはり胡顔に対し寛大に対応する『女状元』の周丞相であろう。周丞相は三幕目でも三件の疑獄事件を扱うことになり、三犯人の手枷を外して、主人公黄崇嘏のところに送って再審議させる。黄崇嘏もまた見事な裁きによって、三人の冤罪を晴らして行く。この幕の主たる筋立てが悪事を容赦なく摘発していくことになく、逆にできるだけ情状を見つけて救うことにあるとすれば、この両者の態度の中にも、『狂鼓史』の禰衡に見たような面影を読み取る事は容易であろう。さらに言えば、女が男に変装して活躍するにもかかわらず、最後に女らしさを取り戻し幸せになるという筋立て自体が（『木蘭』、『女状元』）、女性的な徳への好みを暗示しているのではなかろうか。徐渭が男性的な馬術や剣とともに、女性的な琴を好んだことも彼のそのような本質を暗示している。

さて、徐渭が女性的な徳を好んでいた事実を述べてきたが、女性の最も女性らしさは妻となり母となった成熟した女性の上に発揮されることが多い。彼女らは妻としては夫に服従し、貞節に仕え、嫉妬せず、家内を明るく保ち、時には適切な助言も与え、母としては無力な赤子を抱きあやす姿に象徴されるように、慈愛、寛容、包容力、優しさにあふれている。時に厳しさをもつこともあるが、それはわが子の一層の成長を願う優しい愛情に裏打ちされている。

徐渭の女性を描く筆は、彼女らのそのような姿を、深い思いやりと賛嘆の念をもって眺めているようである。例えば、既述した白母は主人に代わり男勝りの活躍をしたが、一面次のような事実も述べられている。

「県が江水に阻まれ、船で人を渡そうとした所、先を争って溺死するものが多かった。母は主人に勧め浮橋を作って人を救った。公の恩恵ある政治はおおよそ母の気持ちから出ているものが多い。公を亡くし、帰って行くとき、民の哭声は郊野にあふれ、香典をもって送る婦人は魚鱗のように道に並んでいた」（白母伝）。

また、絵画の師である陳鶴の妻と家庭の様子は次のように述べられている。

「山人（陳鶴）は客を毎夜宴に招いた。飲食を調え、巾服を繕うのに、新しい工夫を出したのは、すべて安人（妻の胡安人）の助けであった。彼女はどんなことでもたちどころにうまくできた。そのせいで、山人は内には孝友、外にはますます存分に振る舞い、一世を驚かす事ができた。山人は東方朔に似ている。朔はしばしば長安の女を買ったが、妻は嫉妬しなかった。また肉を割いて持ち帰り、妻に与えて喜んだが、これは山人夫婦と非常によく似ている」（三２６／６４０、陳山人墓表）。

夫人の心遣いによって醸し出される、和らいだ家庭の雰囲気が漂ってくる。

封建道徳の中では、女性は忍従の生活を余儀なくされ、けなげに生きながら悲劇的な結末を迎える事も多い。徐渭はそのような女性たちにも深い思いやりをもっていた。姑章にいじめられる女（三６／２１２、周愍婦。三１９／５５４、周愍婦集序）。貞節の烈婦。彼女らの徳は十分に伸び切らず、封建道徳の重圧の中で押しつぶされて行ったが、徐渭はそれらを残念に思い、いとおしみを込めて顕賞しようとした。

しかし、彼は女性に対し、男性主体の世界で忍従に甘んじている消極的な徳の面を評価しているだけではない。彼女らの教育にもつ力、さらに母体のもつ積極的な働きを評価していることも忘れてはならない。例えば、友人の張鳴教が上海から朱邦憲と父親（福州公）の詩文集を持ち帰り、彼らの母（妻・蔡孺人）について語ったとき、およそ次のようなことを述べている。

「（福州公が名御史となり、賢大夫となり、名宦となったのは）孺人之れを内に助けるなり。邦憲始めて孤、既に長じ、……高人為り。入れば則ち孝養を尽くし、出れば則ち交游多きは、則ち孺人之れを上に理むるなり。夫れ其の妻を知らざれば夫を視、其の母を知らざればその子を視る。余れ福州公の集、邦憲の詩篇を観れば、鳴教の言無きと雖も、固より蔡孺人なる者の其の妻と母為る有るを知るなり。鳴教又た予が為に孺人早く節を持し、家務を処し、銭財の諸もろの難とする所を理むを道うに及ぶ。予れをして早く聞知するを得さしめば、則ち又た必ずしも其の夫の宦跡とその子の名聞に熟さずして、決して其の夫と子、又た宜しく福州公、邦憲の賢者有るべきを知るなり」（ｋ１５／９６０、寿朱母夫人序）。

「福州公と邦憲の詩文集を見れば、友人が何をいわなくても、蔡孺人が彼らの妻であり母であることが分かる」、「蔡孺人の以前の様子を早く知っていれば、夫の官跡と子の評

判を十分知らなくとも、夫と子が賢を発揮していた事がはっきり分かったであろう」という発言は、夫や子供は母であり妻である女性に大きな影響を受けている事を暗示している。家庭内における女性の力ははなはだ大きいと言わねばならない。

一般に、父権社会では子の成功は父に帰せられる場合が多いが、徐渭は「古今、子の才賢を称する者、多く父に詳にして母に略。……母の子に於けるや烈女傳の称する所より、下欧蘇の母氏に迨ぶまで、其の父を労する無くして其の子を成す。……此れに由りて之れを観れば、子は未だ必ずしも皆な父には成らず」（k15／947、寿胡母序）と述べ、そのような世間の風潮にも疑問の目をむけていた。特に、次のような言葉に注目したい。

「凡そ物の常気を含み、以て生まれる者は、其の物の本質を直視して、其の奇恆（非凡か平凡か）を知るのみ。玉に至りては則ち璞を望みて別ち、金は則ち鉱を探りて識り、砂は則ち其の牀を按じて定む。故に至宝奇英、其の子を視るに必ず其の母を視る」（三28／665、祭羅母）。

ここでは、母が玉、金、丹砂における鉱脈あるいは源泉の地位、言い換えれば子の本質という重要な地位を与えられ、父の影は薄い。彼がなぜ、子に対する母の重要性をこれほど認識していたかという一つの理由は、あるいは次のように述べる万物の発生論の立場から見当がつくかもしれない。

「邃古の初め、天其の気を施し、地受けて化形わる。人と万物皆な土に穴して以て生まる。亦た近世の父種えて母之れを胎するが若きなり」（三19／555、著郭氏序）。

「今夫れ天地の万物に於けるや、之れを生む者は天にして、之れを成す者は地なり。天一施して其の功畢る。地其の施を受け、其の朝夕若しくは周歳を以てして成る者は論無きなり。乃ち豫章の若きは、必ず七年にして初めて芽あり」（寿胡母序）。

これはおよそ以下のような意味になる。

人と万物は天と地の両者の力で生まれている。天は気を施し、地は天の気を受け、形を与えて成長させて行く。天の気は成形と成長のきっかけを与えるが、成長にとって地も天に劣らず重要とされる。なぜなら、天は成形のきっかけを与えるに過ぎないが、地は豫章の例にあるように、長いときをかけて育んで行く必要があったからである。

ここでいう天とは父、地とは母にほかならない。このような意識から、母の重要性が説かれるに至ったと考えられる。しかし、このような思考は実は中国人に普遍的な発生

論に沿ったものでもあるから、これだけでは母の重要性は父と並ぶか少し越える程度で、それほど大きなものと言えないかもしれない。ここまで来ると、彼の実生活における母の存在がどのようなものであったか、もう少し考えてみる必要がありそうである。

既述の通り、彼の父は彼が生まれてから百日で亡くなり、その後は主に母親の手で育てられた。この事実は、子に対する母の影響力の強さを説く理由の一端を示唆している。しかも、この母は「宜人（母の苗宜人）性絶敏、略ぼ書を知る。……其の才略酬応し、畜醸種植し、籌策を出入し（はかりごとを立て）、禁持を駁辨する（計画を正す）」（嫡母苗宜人墓誌銘）というように、教養もあったし、家庭を取り仕切るのにかなりの手腕を備えた人物でもあった。

苗宜人はもともと雲南省の出身で、杭州の風俗になじめず、徐家の先妻の生んだ息子たち夫婦とも、夫の親族たちともなじめなかった。そのうえ、夫がなくなり一家が零落して行く中で故郷に残して来た寡婦である母の事も心配しながら、悲嘆にくれる毎日を送っていた。しかも実の子供はできず、将来を期待するのは侍婢の生んだ幼い徐渭だけであった。このような環境の中で頼りになるのは、自らの才覚だけである。彼女が徐家の中でいかに弱みを見せず、肩肘を張って生きて来たかは容易に想像がつく。彼女の男勝りの強さは、「其の身を持するは厳毅尊重、内外敬憚せざる莫し。……宗戚子婦、賓客塾師、老牙嫗、悍奴婢も気を失わざる靡し」というほどであった（同上）。幼い徐渭にとって、このような母はしだいに有能で絶対的に頼りになる女性に見えてきたに違いない。しかも彼女は強いだけではなく、「渭を保愛教訓することは則ち百変を窮め、百物を致し、数百金を散じ、終身の心力を竭す」、あるいは「渭を宝にする」程の気遣いを持っていたから、彼は感謝の気持ちを百紙を重ねても書き尽くせず、我が身を百回粉にしても、恩に報いることができないと感じていた（嫡母苗宜人墓誌銘）。母の病が激しさを加えたとき、徐渭は頭を床に打ちつけ、血を出しながら身代わりを神に願った。卜人に占ってもらったところ、望みのない結果が出たため、三日間何も口に入らなかった（畸譜）。いよいよ臨終のとき、母は徐渭の臂を噛んで別離を告げ、火葬して骨を自分の母の故郷へ持ち帰るようにと命じた（嫡母苗宜人墓誌銘）。このように二人の親密感を強めた中には、苗宜人自身が徐渭とおなじように生まれたばかりに父を失っていた事実（二十一歳で病死）があったかもしれない。

それはともかく、母の存命中幼い徐渭は恐らく大きな存在である彼女の一語一語を絶対者の声を聞く思いで聞いていたに違いない。彼が自分の母だけでなく一般に母の言葉

に敏感であったことは、韓信と漂母の有名なエピソードについて述べた次の文章、「漂母は人を知らない。一時の気持ちから韓信に恵みを与えたに過ぎない。韓信に対する数語を見ればそのことはよく分かるのに、古今の論者はみな誤解している」（三5／136、漂母非能知人……）からも想像できる。この文章から、彼が神経をとがらせて耳を傾け、母の言葉の意味を熱心に探ろうとしていた姿が想像される。彼が子に対する母の影響力の強さを認識するに至ったのも、恐らく育ての親苗宜人の与えたこのような強い印象によるのである。

女性的な徳は徐渭にとって好ましいものであった。とりわけ、成熟した母が見せる徳は苗宜人の影響もあって、一層魅力的なものになった。苗宜人の墓誌銘の中で、徐渭は彼女が自分を宝のように扱った事を十分書けなかったと悔やんでいる。記録するスペースがあれば、彼は母の暖かさをもっと詳しく書いていたかもしれない。しかし、子供のころ近所の遊び仲間であった張子錫、子文の母を述べた文章は、その不足を補っている感じがする。

「（張氏の）太君は太公とともに、（わたしたちを）手でなでてかわいがり、わたしが行くとおこしや飴を食わせ、果物を袖の中に入れてくれることもあった。芝居遊びをして髪がほつれ体が汚れると、髪をくしけずり体を洗い、服がほころびると針で繕い、すすいで洗い、暖めてしわを延ばし、細かなことまで厭わなかった。家はもともと将軍であるから、兵器を備えていた。あるものは剣や槍で遊び、弓を拾い上げて打ったりした。馬小屋の馬を引っ張り出し、たづなもつけずにかけ回り、防御柵を弓で打つと、頭を越えて向こうにあるものを壊したりしたが、母はこれを愛して怒りの色を表さなかった。二人の息子にもこれを禁じたり、のしることはなかった。将来大きく伸びる事を期待し、小さなことで児女のように縛り付ける事はしなかった」（三20／568、張母八十序）。

しかし、賢母苗宜人に育てられた徐渭は女性の美点に敏感な反面、女性を見る目もその分だけ厳しくなったことも忘れてはなるまい。彼が最初の妻を亡くしてから、よい伴侶になかなか巡りあえなかったり、遊郭に出入りしながら妓女を嘲笑する詩をたくさん書いたりしたこと（注29）もそれと関係する。「畸譜」の中には、「劣」という厳しい一語で断罪された二人の女性の記録がある。

「二十九歳。始めて幸いに母を迎えて以て養う。杭の女胡を買い之れを奉ずるに劣なり」。

「三十九歳。夏、杭の王に入贅す。劣甚だし。始めて詒かれて誤る。秋、之れを絶つ。今に至るまで恨み已

まず」。

前者は生母と一緒に住むようになり、世話をする妾を買った所、出来が悪かったという記録であり、後者は胡宗憲の仲介で王家に入り婿した所、できが悪く今に至るまで（七十三歳に至っても）恨みに思うという記録である。「劣」という一字に彼の女性に対する厳しい目が集約されているように思われる。

四、結論

徐渭の『四声猿』に収められる四戯曲のうち、三つは性的変身が特徴になっている。『翠郷夢』は和尚が女性に生まれ変わり、後にまた男性に変身する。『木蘭』は女性が男装して戦場で手柄を立て、『女状元』は女性が男装して官界で活躍する。これらの戯曲では、女性が男性以上に目覚ましい働きを示すという共通した内容をもっている。男性的な『狂鼓史』にも実は女性原理が伺える事を指摘した。このように見てくると、徐渭の劇には女性の果たす役割が大きく、また性的変身という主題も顕著である。最後にそれらについて一考して見る。

まず、性の変身劇は男性と女性のそれぞれの特徴を際立たせやすいという利点があることを指摘したい。女が男になる場合、女らしさを消すためどうしても男らしさを誇張して演じるし、女に帰ったときも、今まで演じていた男らしさと対照になるため、女らしさが余計に目立ってくる。つまり二人の男女を対照して演じさせるより、一人の身で男女を演じさせる方が、単純であるが効果的に男女の性格を表現できるという計算があったかもしれない。これは、舞台だけでなくせりふの上でも当てはまる。しかし、男女が転換する人物を好んで描いたのは、計算ばかりでなく徐渭が既記したように攻撃的な精神と女性的な精神両者への愛好を示していた事の（無意識の）反映もあったと考えられる。しかし、徐渭の戯曲はどちらかと言えば、男性よりも女性が目覚ましい活躍をする場合が多い。なぜ女性を主人公、あるいはより重要な役柄にしたのだろうか。表面的には男性的な北曲より、女性的な南曲を好んだ事が考えられる。しかし、もっと深い理由はなかったろうか。理由の一つに当時の男性が彼の目にはややふがいないように写っていた事実があげられる。

「わたしは女として十七年生き、男として十二年過ごした。万や千の目に見られてきたけど、誰がわたしをオスかメスか区別できたでしょうか。オス、メスの区別は目だけに頼ってはなりませんよ」（注30）（木蘭）という木蘭の言葉は、男性が男性らしさを喪失しているという徐渭の嘆き

を代弁しているようである。他にも既述の女の大道芸人を好んだというように、活気ある女性の姿に好感をもっていたこともあげられる。彼は木蘭のキャラクターが好きだったらしく、『女状元』の中でも好意的に言及されていることも思い浮かぶ。しかし、より大きな理由として、彼が前章でみたように女性のもつ徳を大きく評価していた事実が無視できない。封建社会では男の能力は高く、女は劣るというのが公認の道理であった。したがって、男性という外見だけを頼りにしている無能な人物も多かった事は容易に想像がつく。しかし、彼の周囲には病弱な夫に替わり、賊に立ち向かった気丈な女性や、女性らしい優しさで家庭を支えた賢女がいたのである。徐渭は女というだけで、男より低く評価されなければならない女性の立場を憐れんだ。かりに男性がいなくても、女性は危機を乗り越えていけるのではなかろうか。あるいは男性がいないときこそ、女性は名を成すチャンスなのではなかろうか。若くして寡婦になった貢氏について述べた次の言葉が思い浮かぶ。

夫は短命で、貢は長命であった。そこで始めて貢の名が著れた。もし、長短を等しくすれば貢の名は著れたであろうか。天が雌（の仕事）を完成させようとすれば、きっと雄をいなくさせるのか。それとも偶然そうなっただけなのか。（貢氏伝）。

婉曲的な表現とはいえ、ここでは女性は男性がいなくても男性に匹敵する働きが可能であることを示唆しているように思われる。そして、彼がこのように女性の能力を高く評価するに至った理由は、ごく身近に苗宜人という絶好のモデルがいたからにほかなるまい。

苗宜人は早く夫を亡くし、徐渭を女の身ひとつで育てて来た。彼女の「内外を敬憚させ、……親族、子婦から荒っぽい奴婢の気までもくじいてしまう」と評される男勝りの強さは、『木蘭』の主人公木蘭の姿を彷彿させる。また『女状元』において科挙に及第する男装の黄崇嘏は母と理想化された徐渭自身の合体した姿である。恐らく、母に恩返しのできない後ろめたさを感じていた徐渭は、この劇を書くことによって心の負担をいくらか軽減できたのではなかろうか。

しかし、忘れてならないのは、四つの劇に共通して見られる平和的で穏やかな調子である。『狂鼓史』では禰衡が最後に曹操を許す。『翠郷夢』では長官の家を没落させようと復讐の鬼と化した和尚が、最後には兄弟子に諭されてすべてを許すようになる。『木蘭』、『女状元』では男勝りの活躍をする主人公が、最後には恥じらい深い女に戻り、それぞれすばらしい男性と結婚する。男らしい攻撃的な人間性をもつ徐渭に似合わない、平和的で優しい結末といえ

る。しかし、ここには女性的な優しい徳を愛好する彼の本質もよくうかがえる。さらに、この優しさは彼の神経症を癒す最高の良薬でもあったことから、『四声猿』には苗宜人と同時に彼の神経症が相当な影を落している事実が分かるのである。

注

1　『徐文長的故事』（謝徳銑等編、浙江人民出版社、１９８２年）参照。ただし、本書は庸俗、低級趣味の逸話を除くと断っているから、徐渭の全貌は窺いにくい。民国時代の上海等では徐渭の逸話集が多数出版されたというが、筆者は未見。

2　『徐渭的文学与藝術』（梁一成編著、藝文印書館、１９７７年。ｐ２９２）

3　狂３／１３―４／１（『狂鼓史魚陽三弄』３頁１３行目から４頁１行目を指す。以下この例に倣う。テキストは周中明校注『四声猿』、上海古籍出版社、１９８４年を用いる）

4　三７／２２９、将牧羊、庚戌元旦筮之、得明夷之上六。

5　三５／１２１、三１１／３５９、上谷歌九首には塞北の風物が歌われている。

6　翠２３／１０

7　翠２４／１

8　翠２４／１１、１２

9　翠２５／３

10　女６８／１１

11　女６８／１３

12　女６８／１４

13　女６９／１―３

14　女６９／４

15　女６９／７、８

16　「予れ時事に激する有れば、瘈を病むこと甚だし。鬼神之れに憑く者有るが若し」（三１９／５５５、海上生華氏序）とある。瘈とは、『中国医学大辞典』（謝観編纂、商務印書館。１９２１年序）３７９０頁の瘈の項に「掣と通ず。『素問気交変大論』に行善瘈、脚下痛。按感受風邪、日久弗治、従所剋而伝於心、筋脈相引而急、名曰瘈。蓋心病則血燥、筋脈相引、則手足攣掣、故名」という。この記述によれば、瘈はひきつけのようだ。白鷗殤（三４／８８）に「乃ち予忽ち劇痾、食わず但堅仆、四大且に捐を告げんとす」とある。これは病んで身体が硬直する状態をいうようだ。

17　内山知也『明代文人論』（木耳社、１９８６年）第六章、徐渭の狂気について、ｐ２６８からの引用。『医学』（佚草、巻九）は未見（本稿のテキストに用いた『徐渭集』には未収）。

18 女69／14
19 女69／14
20 木45／3
21 木56／12
22 木56／13、14
23 翠21／12、13
24 狂6／13、14
25 狂7／4、5
26 狂8／8
27 狂10／4、5
28 注2を参照。
29 高峰『玉禅師翠郷一夢』の創作と徐渭（愛知教育大学研究報告、第46輯、人文・社会科学篇、『徐渭と玉禅師翠郷一夢』所収）を参照。
30 木57／1、2

※ なお、『四声猿』以外の徐渭の詩文等は本文、注とも中国古典基本叢書の中華書局『徐渭集』1983年を用いた。略号、たとえば三7／229は該書所収の徐文長三集巻7、229頁を示す。k2／721は徐文長逸稿巻2、721頁を示す。s3／1106は徐文長佚草巻3、1106頁を示す。